

水泳の授業が消える？

私が小学生のころ、学校にプールはなかった。体育の授業ではないが、夏には町営プールに学年全員で出かけて、水遊びや水泳を楽しんだ記憶がある。もちろん夏休みの水泳教室もなく、町営プールに足を運ぶか、幅5m水深80cmぐらいの近くの小川で地域の保護者がロープで囲った範囲で、週に一回集落の仲間と水遊びを楽しんだ。冷たい流れの中で実に快適であったが、蛇も泳いでくることがあったので、みんなで騒ぎながらの時間を過ごした。蛇を苦手としない仲間は、蛇が来るとその下に潜っていたが、蛇の苦手な私は急いで川土手に上がって逃げたものだ。監視役の母は笑っていた。

小学校体育に「水泳」が盛り込まれたのは、1968年の学習指導要領の改訂からである。1955年に高松市沖で連絡船「紫雲丸」が沈没し、修学旅行中の小中学生ら168人が犠牲になった事故を機に必要性が高まったと言われている。「泳げる」という運動技能よりも、自分で自分の命を守り、他者へもそう言うことを広げることが重要と位置付けたようだ。しかし、実際には1960年ローマオリンピック、1964年東京オリンピックでの水泳の惨敗に危機感を抱いた日本体育協会の強い要請もあって、水泳が学校体育に登場したという確かな説もある。よって、生徒の誰もが中学2年生までにクロールと平泳ぎで25m泳ぐスキルが求められた。

そもそも学校体育とは、スポーツの楽しさを技術の習得によってうまくなる喜びを味わうという教育目的を持っている。誰もがスポーツの楽しさを味わい、スポーツに主体的に関わっていける生涯スポーツの理念もある。そういう意味はでうまくなることは指導の根幹であった。

また技術の獲得は自由の広がりでもある。水泳で言えば、泳げる人と泳げない人には格段の差が存在する。家族で海水浴に行ったとき、海での楽しみ方はビーチバレーをしたり、体を焼いたり、かき氷を食べたりすることもひとつだが、泳げる人には大海原で泳ぐと言う楽しみがあるが、泳げない人には残念ながらその楽しみはない。スキーで言えば、スキーを始めた人が何年たってもボーゲンスタイルから抜け出せなかったら、スピードを自らコントロールしながら雪の斜面を自由に滑る楽しみが味わえず、やがて興味を無くしていくということは、スキー指導者なら誰もが知っている。したがって、体育やスポーツにおける技術の獲得、つまりうまくなるということは必要十分条件である。

にもかかわらず、近年、全国の公立小中学校で水泳の実技指導を廃止する動きが広がっている。水泳授業が座学になりつつあるというのだ。プールの老朽化による改修費負担、水質管理などの教員の負担、熱中症のリスク、女生徒の肌の露出への抵抗感と行政や学校の負担も大きくなり、現場での指導の難しさも出てきているらしい。高度経済成長期にできた学校プールもライフラインと同じ課題を抱えつつあるということだろう。

そういえば、豊翔高等学院の夏の合宿も海水浴をメインにすると参加者が激減し、今年は秋の「田舎体験」としての農村留学に企画変更した。泳ぎたくない生徒が増えているのか？

(丹羽 豊)